

花博の電撃殺虫器

スズメ哀れ

次々巻き添え感電死

国際花と緑の博覧会(花の万博)が開かれている大阪・鶴見緑地の会場の周りに、ユスリカやガなどの退治用に花の万博協会が設置している高電圧の電撃殺虫器に、害虫ばかりかチョウやトンボ、さらにはスズメなどの鳥がつかまり、次々に死んでいる。「入場者が害虫で不快な思いをしないためには、やむを得ない」と同協会は説明しているが、緑が多ければ、虫や野鳥が増えるのは自然の成り行き。無害な虫や鳥も含めた「無差別駆除」は「人間と自然の共生」という花の万博の理念に反するのでは——との疑問の声も上がっている。



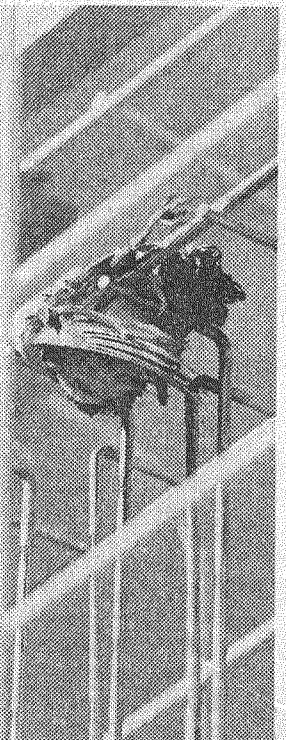
会場を取り囲む電撃殺虫器
—大阪・鶴見緑地の花の万博会場で

電撃殺虫器は、夕方から夜明けまで点灯。普通の蛍光灯の百倍も誘引力のある青白い灯で虫を呼び寄せ、格子状の針金に六千六百ボルトの高圧電流を流して、当たった虫をショック死させる。夜間、虫が場内に入り込むのを場内から周辺の住宅地に迷い出すのを防ぐため、会場を囲んで三十メートル間隔で計百五十基設置されている。

ユスリカやガ、ハエなどの虫が吸い寄せられると、ジッと音がして黒くけになる。ところが青虫は気持ち悪いという考え

緑があれば虫も来るはず……

「無差別」に疑問の声



電撃殺虫器に引っかかり死んだスズメ
—花の万博会場で

が、スズメや害虫を食べにきたコウモリが感電死したケースがあちこちで確認されている。また、大阪府鳥獣専門員の鈴木安介さんは「驚きました。また、バラバラになったスズメの死体が電撃殺虫器の下に落ちていたこともあった」。

花の万博協会には六月、場内の屋外レストランなどから「ユスリカが出て困る」「羽虫が出た」「などという苦情が何件も寄せられた。夏になって緑の色が濃くなるにつれ、入場者がハチに刺され場内の診療所などで手当を受けることも増えた。このため、電撃殺虫器のほかに、業者に依頼して殺虫剤の散布にも力を入れている。

しかし、こうした無差別駆除が、これに対して花の万博協会の施設管理部は「虫がいると不快に感じる人がいるのも現実。みなさんに花と緑の美しさを知ってもらおうのが博覧会の目的。やむを得ず駆除をしている」と話が